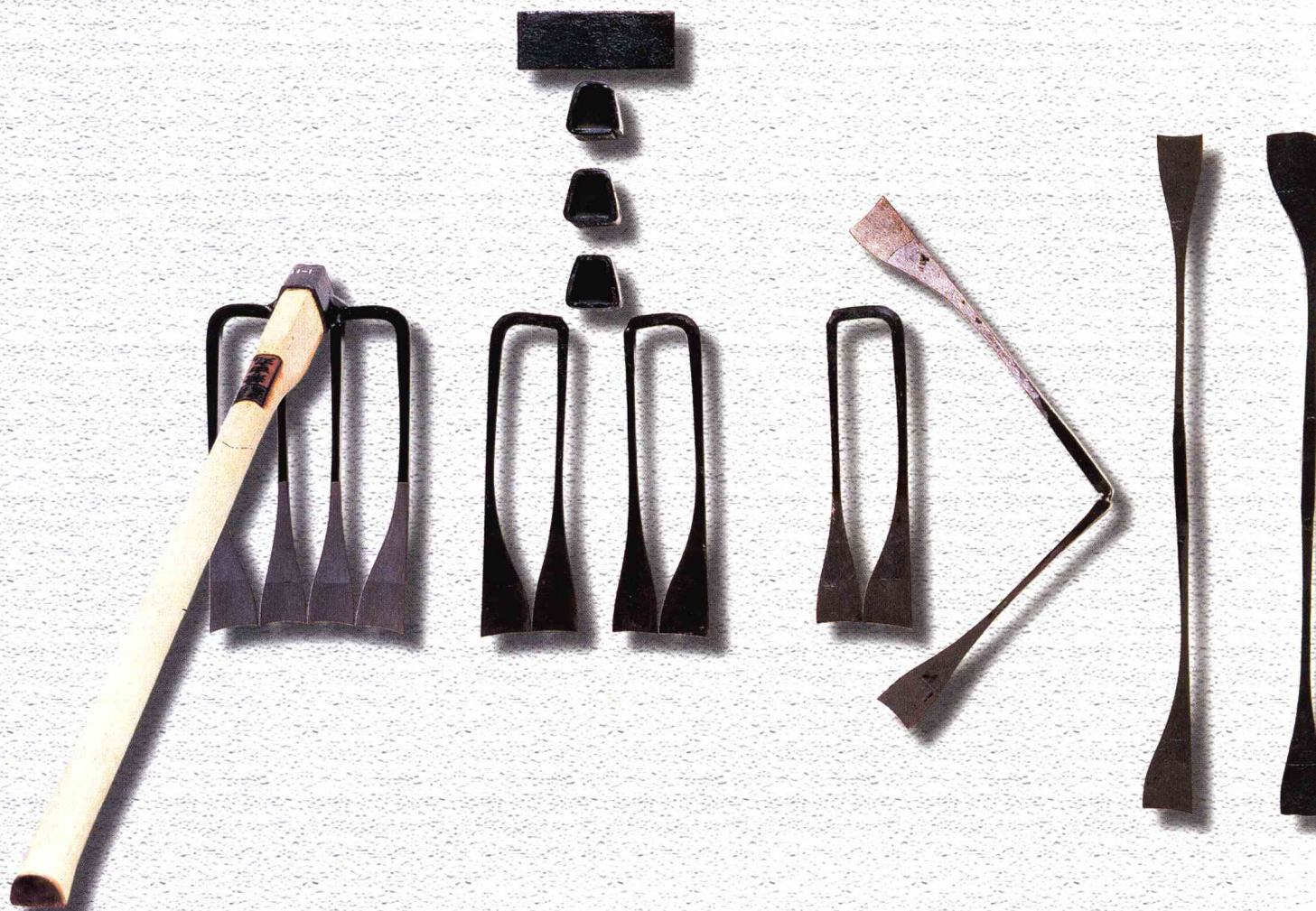




Steel 鉄の点景 Landscape

鍬は農耕の始まりとともに使われ始め、今なお使い続けている息の長い道具である。日本では弥生時代に木製の鍬が現れ、5世紀に大陸から鉄製のものが入ってきたといわれる。木から鉄先へと変化して、生活の基盤となる農業を支え続けてきた鍬だが、この道具に焦点をあわせて歴史を見て行くうちに、はっとするようなリアルな姿が浮かび上がってくることに驚かされる。今回は、膨大な鍬についての研究のなかから、近世・近代のある側面にスポットを当てて、鍬の面白さを「つまみ食い」的に味わってみたい。

歴史を耕した鉄

鍬くわ

江戸時代のはじめには村の鍛冶屋はいなかった

しばしも休まず……と始まる村の鍛冶屋の歌。鍛冶仕事の見事さに耽溺するかのようなその歌詞は、農民たちのために農具を打ち続けた古きよき時代の鍛冶屋というイメージを喚起してくれる。だが、安易に叙情にひたる前に、実は村に鍛冶屋が住みつくようになったのは、歴史上そう古いことではないという事実を確認しておかねばならない。

江戸時代はじめは、士農工商の身分によって住むところが分かれており、鍛冶のような「工」が農村に住むことは禁じられていた。鍛冶職は城下町などに特権を与えられて集住していたから、農村に鍛冶屋が住むようになったのは、江戸時代も後半のことで一般には明治になって古い身分制度が廃止されてからのことである、と国立歴史民俗学博物館教授・朝岡康二氏はいう。

村に鍛冶屋がいなかったとすると、それまではどうしていたのだろうか。移動の許可を受けるために「出職」という形で鑑札を持ち、特定の鍛冶町から農村へ出張をしていたというのが実態だったらしい。それも主に修理や打ち直しを中心に行っていた。当時は京や大阪などで製品化された「くだりもの」といわれる出来合いの農具がかなり広範に流通していた。そうした鉄の流通を背景に、古鉄を打ちなおし、リサイクルを行っていたのが野鍛冶（農鍛冶）だった。

写真の熊手のような形の鍬は、またぐわ股鍬と呼ばれるもので、国立歴史民俗博物館の朝岡教授らが現存する野鍛冶に依頼し複製したものである。江戸後期の農学者大蔵永常が自著『農具便利論』の中で「鍬は三里を隔てずして違ふものなり」と記しているように、地域によってさまざまな形態が見られる鍬の中でも、股鍬はとくに明治期以降東日本で急速に広がったものの代表選手である。

この股鍬の原形は、近世後期に使われるようになっていったびっちゅうくわ備中鍬にあったと考えられている。備中鍬は『農具便利論』にも登場し、西日本で多く使われていることが記されている。なぜこういう形態の鍬が急に東日本で使われるようになったのだろうか。それはひとつには、越後平野などで急速に乾田化が

四本子と呼ばれるばち型の爪をもつ股鍬の複製品と、その鍛造工程が分かる分解図。明治期以降の東日本に広く普及し、もっとも主要な農具として使われてきた。

進行したこととかかわりがあると考えられる。

マンノウの普及と村の鍛冶屋の登場

明治期に日本は洋式農法を取り入れ、いわゆる乾田化が促進されたとされる。乾田とは、水稻を収穫した後に水を抜いて田を一度乾燥させることであるが、そこに麦などを裏作として栽培する、いわゆる二毛作がはやくから取り入れられていた。西日本にくらべて東日本では、この時期に乾田化が急速に進んだが、水を抜いた後の土は湿って重く、表面積の大きい平^{ひら}鍬で起こすのはかなりの重労働であったと考えられ、効率を上げるために表面積の少ない備中鍬が浸透していったというのである。

関東地方の台地部では殖産興業とともに、桑園が拡大していったこと、勤労奨励により寸暇を惜しんで働こうとする傾向が強まっていったこと、女性の労働力を動員しようとする傾向、なども「マンノウ」（この地域の股鍬）の普及を促した、と朝岡教授は指摘する。

明治以前この地域ではおもに土起こしにはイグワなどと呼ばれる大型の鋤^{すき}が使われていたと考えられている。イグワは鍬のように上から打ち下ろすのではなく、いわばアンダースローで土に入れ、足をのせかけ、今日風にいえばスコップで穴を掘るように使う。女手では手にあまる作業で、この時期にもう少し手軽な方法をとということから、「マンノウ」が使われるようになったと考えられる。

鍬先が鍛造品であるのに対しイグワの先は鋳造によって造られていた。明治以前、農具は鍬と鋤を基本としていたが、股鍬が普及するとともに、鋤は場所によってはまったく姿を消してしまうほどになっていったという。

女性労働力を巻き込み、生産性を向上させていく、などと書くとまるで今日の話のようだが、農業ではすでにはやくから行われてきたことで、その流れが今日の日本の農村を形づくってきたのだと考えると、なにか目の覚めるような思いにさえとらわれる。

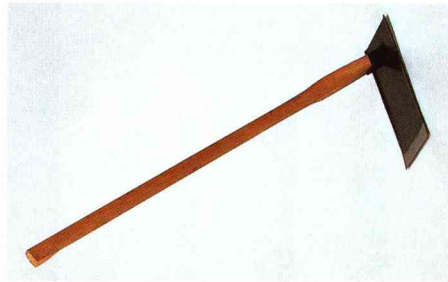
国立歴史民俗博物館

歴史学・考古学・民俗学の3分野の協業を通じて、わが国の歴史・文化を究明することを目的に資料収集・保管・展示を行っている。緑豊かな佐倉城址跡に、充実した5つの展示室を持ち、散策もかねて訪れるのにも好適な博物館。実物資料の展示のほか、すでに現存しないものなども複製品や復元模型を積極的に取り入れ、各テーマを具体的に・系統的に解説してくれる。

毎週月曜日（祝祭日の場合は翌日）と年末年始は休館。



木製の土台にU字型の切れ込みがある刃を取り付けた、いわゆる風呂鍬（ふろぐわ）の複製品。5世紀に大陸から導入され、明治・大正期に風呂部分まで鉄製のものが登場するまで、日本の鍬の主流だった。



木製の風呂部分をもたない平鍬の複製品。形のうえでは近世に土工たちが開墾に使った黒鍬の特徴を引き継いでいる。

江戸時代から「出職」でやってきていた鍛冶屋が農村に住み着いてしまうこともまれにあったらしいが、明治になって移動の自由がおおやけに認められるようになると格段に増えていったという。これがいわゆる村の鍛冶屋になっていったわけだ。鍛冶町では、親方になれるのは、小僧に入った者のうち5人にひとり程度であったというから、親方候補からもれた職人たちが新しい自由な空気の中で農村に新天地を求めていったことは、想像に難くない。こうした「人の流れ」に呼応して、うちものを中心とする村の鍛冶屋による農村の鉄文化が定着していったのだらうと推測することができる。

ひとつの道具に焦点をあわせて歴史を眺めてみると、社会のしくみが比較的短い間に大きく変化している様をリアルに見ることができる。明治以前の鍛冶をめぐる歴史もやはり、変化の積み重ねなのだと朝岡教授はいう。

いわゆる伝統だと思い込んでいるものの中にも、意外に新しい歴史の根を持っているものが多い。変化の歴史を知ることは、固定化されてしまったわれわれの歴史や伝統に対する観念を、ときほぐしてくれる効果があるのではないだろうか。また同時に、今、さまざまにいわれる社会的閉塞状況も実は根は意外に新しく、それを変えてゆくことは考えているより困難なことではないのかもしれないという希望さえ抱かせてくれるように思えた。

[取材協力・写真提供：国立歴史民俗博物館]



千葉県佐倉城内117番地 TEL043-486-0123

JR＝総武本線佐倉駅よりバス約15分。京成線＝京成佐倉より徒歩約15分。